

その人は目立たない人だった。

睨んでいるのかと怯むほど細い三白眼で、片眉を上げるのが癖の人。肉付きがよくて、猫背で肩を丸めている人。声も少し低くて、怒っているように取られてしまう人。化粧もそんなに濃くなくて、服装もシンプルにまとめられている人。華奢で儂くて小さいおんなのこ、とはカテゴリが違う人。

サークルでは複数の友人とよくわからない話で盛り上がっていて、もしくは一人でスマホの画面とにらめっこしていて、ちらちら盗み見ても表情が変わらない。いつも視線は斜め下を向いていて、笑うと細い眼がいつそう引き伸ばされる。

その人は目立たない人だった。
少なくとも、僕以外の人にとっては。

僕だけの君でいて

夏樹

目立たない人の名前は関口さんという。サークルの同期で、もう四年の付き合いになるけれど、名前で呼んだことはない。「せきぐちかな」とLINEに登録されているから、勝手に名前は知っている。

僕は関口さんのことが一年の頃からたぶん好きだった。たぶんきつと恐らくメイビー、予防線をたくさん張ってしまうのは、僕なんかが、という思いが強いからだ。

それでも僕は関口さんのことがたぶん好きだった。LINEが来るたびに胸がぎゅうと締め付けられて、関口さんが笑うたびにあなたたかい気持ちになった。視線がたまにぶつかって、恥ずかしそうに逸らされるのがたまらなかつた。百七十センチぎりぎりあるかないかの僕と並ぶと、少し低い位置に頭があつて、近づくと互いの腕がわずかに触れて、全神経がそこに集中してしまった。

今でもぴかぴかきらきらと覚えている大学一年の秋。

学祭のシフトが重なって、二人で数時間話す機会があつた。うちのサークルは人気がないらしくお客さんもなかなか来なかつたから、本当に二人きりで沢山話した。どんな話にしても目を細めて頷いてくれて、興味を持って掘り下げてくれた。

僕は自分の趣味になると散弾銃のように話してしまつのに、文句ひとつ言わずにこにこ話を聞いてくれた。だぶついたパーカーとチノパンばかり履いていて、整髪料なんてつけたことない頭髪は耳を半分ほど隠してしまつていて、うっとうしくなつたところに漸く切る始末。そんな僕なのに、二人きりを嫌がることなく楽しんでくれた。

「高橋くんと話したことなかつたけど、めっちゃ楽しいねえ」

そう言ってくれた関口さんと、そのとき初めて目が合った。きつめの三白眼が柔らかく見えた。顎のあたりで短く揃えられた黒髪が、よく見ると光を吸い込んで艶を帯びている。すっぴんに近いくらい化粧っ気がないけれど、つるりとした頬が桃色に染まっている。小さな黒目の上下瞼がちらちらときらめいていた。

そのとき僕の心のいちばん深いところに、関口さんがかつちりと嵌め込まれた。恋に落ちるのにドラマみたいな急展開はいらなくて、アニメや漫画のようなエフェクトもいらなくて、ただ、すんとと嵌まつたのだ。

あの日以来ただの「サークルの同期」は「僕の好きな関口さん」に名前を変えて、僕の中心に座り込んだ。こまめにLINEをしたり、サークルで会つたら声をかけるようにしたら、そこそこに仲良くなれた。と思う。じっくりと時間をかけたからか、かなり信頼もされていると自負している。まだ一緒に出掛けたり、ご飯を食べた

りしたことはないけれど、予定が合えば一緒に行きたいねとよく話をしている。サークルの他の男性より頭一つぶんくらいは関係が深いのではないだろうか。

誰も知らないのだ。一見すると涼し気な三白眼は、細められると目尻がふにやりと下がることを。肉付きがいいせいか豊かな胸元がコンプレックスで猫背になつていふことを。笑うと低い声の上擦つて高くなることを。女の子らしい服装は似合わないからシンプルな服ばかり買つてしまうことを。本当は、華奢で儂くて小さいおんなのこに少しだけ憧れていることを。

誰も知らないのだ。僕だけが知っている。僕が関口さんと話して、関係を深めて、少しずつ知つていった。僕だけが知っている！サークルの誰もが目立たないと片付けてしまふ関口さんは、こんなに魅力的なんだと！

僕しか知らないことをもつと増やしたい。たとえば、名前を呼んだらどんな顔をするのだろうか？頬を朱に染めて、はにかんだりするのだろうか。手をつないだら？抱きしめたら？あの小さなくちびるに触れてみたら？それ以上は、どんな関口さんを見ることができるのだろうか。もしもいつか、僕が関口さんに想いを伝えたら、どんな顔をするのだろうか。

今日もサークルで関口さんは友人たちと楽しく話している。関口さんが全体の輪の中心になることはあまりないけれど、友人同士ではよく快活に話していた。

「高橋どこ見てんの」
「え？や、特にどこも」

ぼんやりと関口さんを盗み見ていたら、低い声が僕の背筋を伸ばした。長い前髪をうっとうしそうにしている男。大井だ。サークル同期の中では一番仲がよくて、いつもだったらと中身の無い話をする間柄。だぶついた黒

セーターにデニムを制服のように着倒している大井は、僕の後ろの席の椅子を引いて、「見てや」とスマホを向けてきた。小さな画面の中には赤髪ショートカットのVtuberがスパチャを読んでいる。華奢な肩が揺れていた。

「高橋に前見せたじゃんこの娘。ほんと面白いんだよマジでリアクションとかうまくてさあ配信見甲斐がある」

大井はそのままいかにその女の子が面白いかを熱心に語り始めた。熱を持って真剣に語るせいかスマホが時折揺れる。ちりんちりん猫の形の小さな鈴が、揺れに合わせて踊っている。

この大井だって、関口さんがどんなにかわいらしくてどんなに愛おしいかは知らないのだ。高校の頃に茶道部だったことも、華奢な女の子になりたいと悩んだことがあることも。「やつぱり男の人って華奢な方が可愛いと思うよね」といつも上げる眉が下げられた悲しそうな顔も。僕だけが知っている。僕だけが！優越感でおかしくなりそうだった。

「配信はマジで見ないんよなあ長くてさ」

「いやわかる。わかるけど！この娘はほんと時間あつという間に経つし一時間くらいで見れる動画もあるから見てほしいんよ！」

「あー一時間はたすかるけど、これ以上沼に落ちるわけにはなあ……」

大井から少し視線をずらして関口さんに目を向けると、関口さんもこちらに顔を向けていた。一瞬だけ互いの視線ががち合つて、すぐに逸らされる。

今僕のこと見てた？

「とりあえずリンク共有しといたから暇なときに見て」
大井がなにか送ってくれたようだが、正直何も手につ

かないほど心臓が高鳴っていた。関口さんがこちらを見ていた。なぜ？話している人なんて僕達の他にもいるのに。僕のことを見ていた。どうして？

サークルも四年目になって、関口さんとの関係を深めていくうちに、関口さんも僕のことを好きなのでは、と思うことが増えてきた。僕のことをよく見ているし、話す嬉しそうに三白眼を細めてくれる。LINEもきちんと返してくれるし、他の男どもとは一線を画すほど仲が良い。もしかして、という種が少しずつ芽を出してすすく育っていく。もしかして、関口さんも僕を？

「自販機行ってくるね」

少しだけ低い関口さんの声が、ざわついた部屋の中でまっすぐ僕に届いた。猫背で丸められた背が扉の向こうに消えていく。思わず立ち上がると、驚いた顔をした大井と目が合った。

「なに。どしたん」

「お茶買ってくるわ」

財布をひつつかんで部屋を出ると、廊下の端に関口さんが立っていた。自販機と向き合つて、真剣に飲み物を選んでいる。

「せ、関口さん」

「わ！びっくりしたあ。高橋くんか」

「うん。え、関口さんもなんか買うの？」

「うん」

関口さんの斜め後ろに陣取つて、ぼつぼつと会話を続ける。ふわりと香る石鹸の匂い。丸みを帯びた後頭部。

「もうサークルに顔出すのも少なくて寂しいねえ」

「ん。そうだね。もう卒業だもんね」

「ね！でも、高橋くんも仲良くなれてよかった」
人生で勇気を出さなければいけない瞬間があるとした

ら、恐らく今なのだと思う。二人きりで、誰もいなくて、さつき目が合った。関口さんは僕のことを待っていてくれるのかも知れない。からからの喉に唾液を流して、乾ききったくちびるを薄く開く。

石鹸の匂い。まるで後頭部。そこから伸びる白くてきれいなうなじ。少し乱れた黒いカーディガンの襟元。

そこから、襟の隙間から覗くうなじに、紅い痕がふたつ散っていた。

こんなの、ドラマや漫画やアニメでしか見たことがない。白にくっきりと映える紅は、虫刺されでは納得しがたいほど扇情的だった。

「せ、きぐちさん」

「ん？」

「それ、その」

先ほどとは全く異なる理由で喉が引き攣る。唇が震える。深く聞きたくはなかった。でも、身体が勝手に進むうとしてしまっている。聞いてどうするんだ。知ってどうするんだ。やめたい。でも。

「香奈」

低い声でした。

弾かれたように振り返る関口さんは、僕のことなんか見ていなかった。細い三白眼は見開かれて少しうるんでいる、頬が朱に染まっている。名前を呼ばれるとそんな顔をするんだ。知らなかった。

関口さんは大きな黒セーターとデニムに駆け寄って、軽くその肩を叩いている。白かったはずのうなじは赤く なっていて、先程の扇情の痕と馴染んでしまいそうなの だだった。

関口さんの動きにつられて、小さな財布についた鈴が揺れた。

ちりんちりと、猫の形の小さな鈴が。